

高校生の月経や妊娠に関する知識とライフイメージについて

About the knowledge of high school students' menstruation and pregnancy and life images

丸 岡 里 香
Rika MARUOKA

要旨

日本の社会における出産は結婚することと強く結びついており、結婚の先延ばしが少子化につながる要因となっている。政策として少子化対策が打ち出されているが、子どもを希望する若者が増えるためには、将来の自分のライフイメージを具体的に持てることが必要と考えられる。筆者は月経や妊娠に関する知識と将来への具体的なイメージがもてる健康教育を実践することを目標に、これまで高校生と大学生へのライフイメージに関する調査を行ってきたが、本調査では、さらに結婚や妊娠を希望する理由としない理由も加えた調査とすることで今後の健康教育を検討する資料とすることを目的とした。その結果高校生の月経や妊娠に関する知識は高いとは言えず、健康教育として将来のライフイメージを持つことができる内容を取り入れることが課題であることが示唆された。

Key Word: 高校生 ライフイメージ 健康教育

I 緒言

現代の日本の少子化に対して、次の世代を担う若者に対する改善策が打ち出されてはいるが、平成27年に実施された「第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」¹⁾の結果が平成28年9月に公表され、独身者調査では異性の交際相手を持たない未婚者は増加し、未婚者の平均希望子ども数、夫婦の平均理想子ども数は前回よりも低下していた。また、夫婦の予定する子ども数も過去最低となり、改善には至らないのが現状である。少子化が進む要因には、経済の低迷が将来に希望を持ちにくいこと、結婚年齢の上昇、不妊症の増加等があげられる。そうした現状のなかで、若者は自らの将来についてどのような認識を持って大人として生きるイメージを持っているのだろうか。筆者はこれまで若者の認識を高校生と大学生に調査し報告してきた²⁾。その中では高校生から大学生への変化として恋愛や性行動が現実的になることが興味や関心を高めていた。一方で月経や妊娠の生理的理解は高校生も大学生も十分とは言えない現状にあり、妊娠出産を先延ばしにした結果の不妊や少子化につながる課題であることが改

めて確認できた。これらの課題は全国的な調査結果も同様であり、自らの将来をイメージすることでライフプランを立てる健康教育が推奨されている。全国の高校生に向けた「知っていますか男性のからだのこと、女性のからだのこと～健康で充実した人生のための基礎知識～」³⁾や「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関する研究」などの教材も開発され、健康教育に活用されている例もみられているように、これからの健康教育の課題として、とり組まれている。

今回の調査では、これまでの調査を踏まえ、前回の調査用紙にある恋愛や結婚、子どもを産むことの希望に対する質問に加え、その理由について質問し、高校生が必要とするものを検討した。社会に出る前の若者が自分の現状をどのように感じているのか、また将来への希望との関連があるか否かを知ることで、包括的な健康教育を行なうための検討資料としたいと考える。

Ⅱ 研究目的

高校生の月経や妊娠の知識とライフイメージの関わりの有無を知ることで、これからの健康教育を検討する。

Ⅲ 研究方法

調査方法：北海道内の公立高等学校で健康教育の事前調査として無記名、自記式質問紙を配布・回収した。

対象：北海道内A町公立高等学校1校の1年生から3年生328名を対象に、質問紙を配布・回収し、そのうちの318名を有効回答とした。

期間：2016年6月

質問項目：恋愛に関して、結婚に関して、子どもを持つことに関して、性に関する知識等

分析方法：統計ソフトエクセルを使用し、単純集計、クロス集計、 χ 二乗検定を行った。

Ⅳ 結果と考察

1. 対象者

有効回答318名の内訳は、男子129名(40.6%)、女子189名(59.4%)、1年生113名(35.5%)、2年生96名(30.2%)、3年生109名(34.3%)であった。

2. 自己像について(図1, 図2)

1) 自分のことが好きか否かを質問したところ、全体では「好き」と答えたのは16名(5.0%)、「まあ好き」と答えたのは121名(38.1%)、「あまり好きではない」と答えたのは133名(41.8%)、「好きではない」と答えたのは48名(15.1%)であった。そのうち男女の回答の差

異を見ると「まあまあ好き」と答えたものは男子の方が多く、「好きではない」と答えたものが女子に多くみられたが有意な差はなかった。

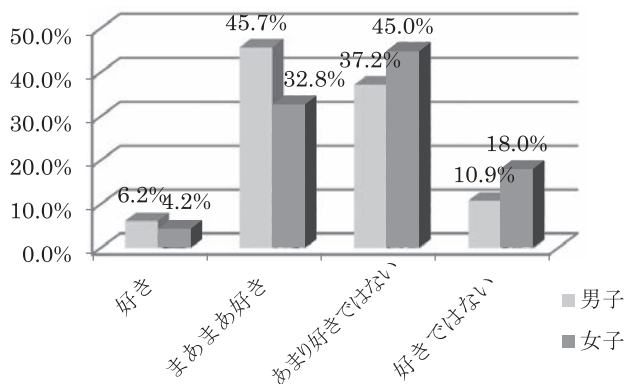


図 1 自分のことが好きですか (n=318)

2) 今幸せだと思うか否かを質問したところ、全体では「とても思う」と答えたのは110名 (34.6%), 「少し思う」と答えたのは150名 (47.2%), 「あまり思わない」と答えたのは51名 (16.0%), 「まったく思わない」と答えたのは7名 (2.2%) であった。そのうち男子は「まあまあ好き」と答えたものが一番多く、女子は「あまり好きではない」と答えたものが一番多かった。

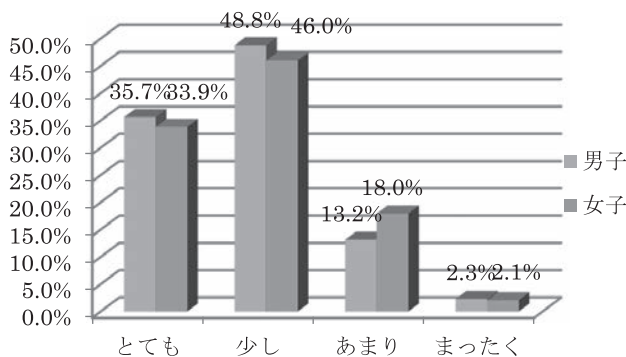


図 2 今幸せだと思えますか (n=318)

3. 将来の結婚について (図 3)

1) 「将来結婚したいと思いますか」の質問に「早くしたい」と答えたものは13.2%, 「いずれれしたい」63.2%, 「したいと思うができないと思う」6.3%, 「しないと思う」6.0%であった。第15回出生動向基本調査では18~34歳の独身者は「いずれれしようと思う」が男性では85.7%, 女性では89.3%であり、本調査の高校生の「早くしたい」「いずれれしたい」をあわせたものと比較すると、男子76.5%, 女性65.7%と男女ともに低く特に女子が低い結果であった。三谷ら⁵⁾による高校生を対象にした母性意識の形成に関する調査では、高校生の意識形成が準備の

段階であることを示しており、高校生から大学生の変化の調査でも女子が大学生になってからの増加が顕著であったことから、本調査の高校生も今後高まることが予測されるが、こうした「準備段階」へのニーズに答える健康教育が必要となっている。

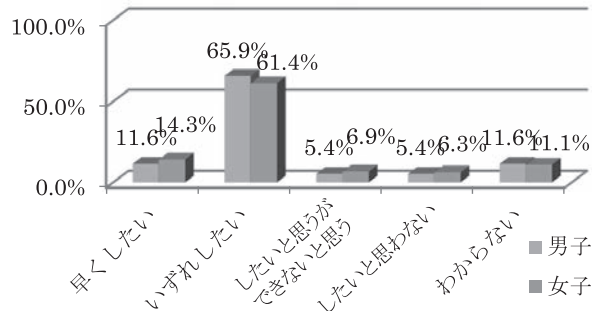


図3 将来結婚したいと思いますか (n=318)

2) 結婚したいと思う理由と思わない理由 (図4. 5)

「早く結婚したい」「いずれ結婚したい」と答えた生徒にその理由を聞いたところ、全体では「好きな人と暮らしたい」「家庭を持ちたい」「子どもを持ちたい」の順であり、男女で有意な差がみられるものはなかったが、「子どもを持ちたい」では約10%の差がみられた。しかし、この結果が子どもを持ちたいか否かと連動していることではなく、女子の結婚が家庭と子育てに結びついていることと、男子の感覚との違いが表れている。全国調査でも「家庭や子どもがもてる」ことを利点と考える割合が増加傾向にあるが、年代が高くなって増加するものではなく独身者の若い世代にも理由として上位であることが分かった。

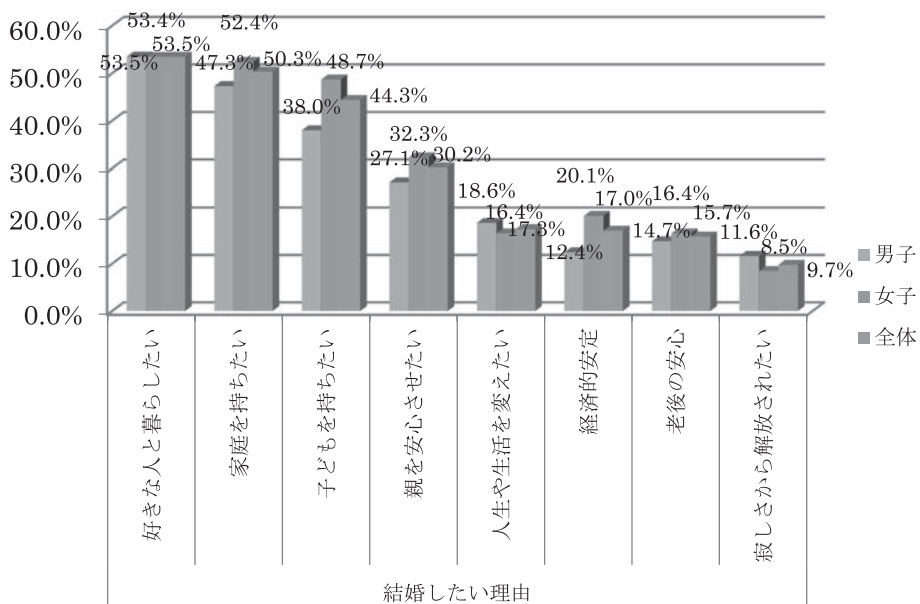


図4 結婚したいと思う理由 (n=243)

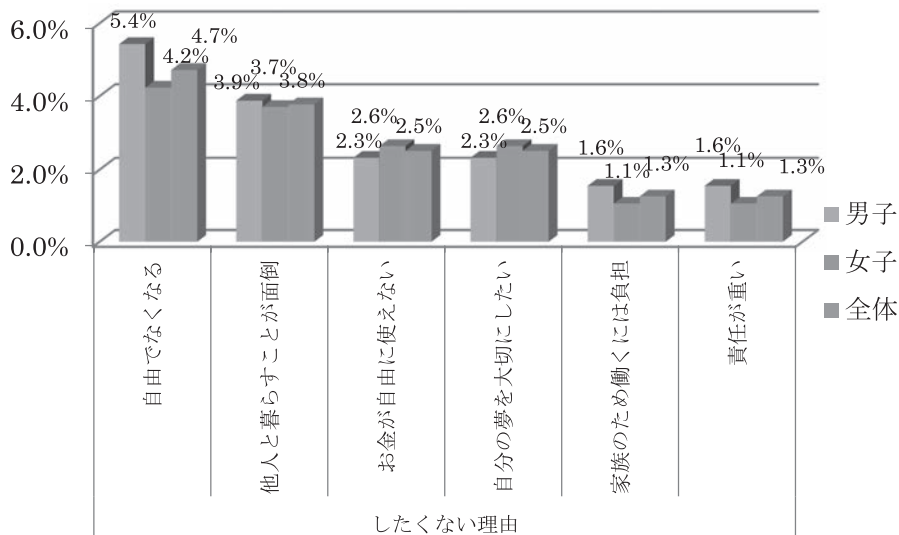


図5 結婚したくない理由 (n=19)

また、「結婚しないと思う」「したいとは思わない」生徒は全体で12.3%であった。どちらも女子の割合がわずかに高かったが、有意な差はみられなかった。理由は「自由でなくなる」「他人と暮らすことが面倒」の順であり男女の有意な差はみられなかった。

4. 将来の子育てについて

1) 「子どもを持ちたいと思いますか」(図6)

「早くほしい」「いずれほしい」と答えたものは全体で80.7%であり、男女の有意な差はみられなかったが男子がわずかに多い割合であった。また「持てないと思う」「ほしくない」は18.9%であり男女の有意な差はみられなかったが女子がわずかに多かった。

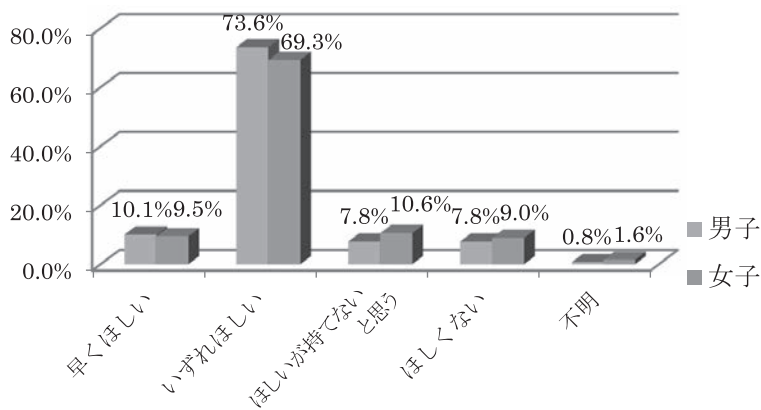


図6 将来子どもを持ちたいと思いますか (n=318)

2) 子どもがほしいと思う理由と思わない理由

子どもがほしいと思う理由について聞いたところ「家族の絆や幸福感を持てる」「子どもはかわいい」と答えたものがそれぞれ50%以上であった。男女の有意な差はみられなかったが「子どもはかわいい」では女子が10%多かった。「持てないと思う」「ほしくない」理由を聞いたところ、全体では「好きではない」「時間や行動が制限される」「お金や手間が負担」の順で多かったが、男子では「時間や行動が制限される」と答えたものが一番多く、男女の割合の違いでは回答数はないが「お金や手間が負担」「煩わしい」とこたえた女子が男子より多くみられた。日本の子育て世帯の役割分担として、家事労働時間の調査では夫婦の家事労働時間は7

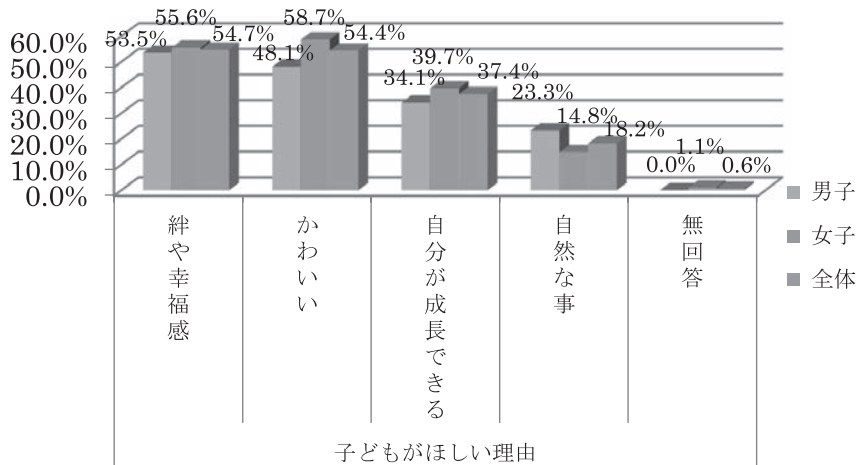


図7 子どもがほしいとおもう理由 (n=257 複数回答)

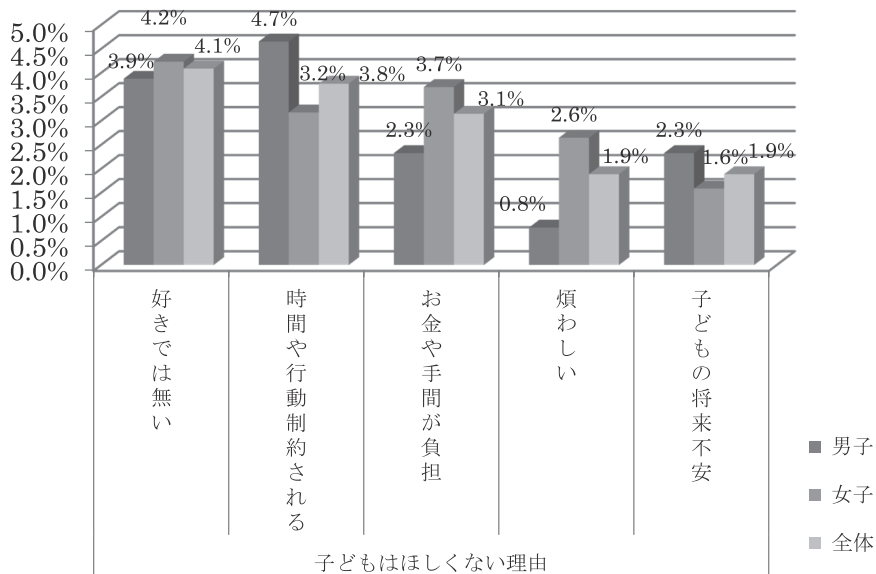


図8 子どもはほしくないと思う理由 (n=27 複数回答)

割が女性の負担時間であり、子どもがいるとさらに負担割合は増えることがわかっている。子どもがいることで女性の家事時間は増えるが、男性の家事時間は減り、他の家族員の家事時間が増えていることもわかっている。こうした時間的割合を見ても女性の家事労働時間が長いことは現状であり、それを「負担」と考えている世代であることがわかる。

5. 女性の月経について (図9)

女性の月経が何歳くらいまでであると思うかを聞いたところ、男女とも「50歳前後まで」と答えたものが多かったが、女子の20%が「60歳前後まで」男児の17.8%が「生きている限り」と答えている。前回の調査²⁾でも大学生より高校生の月経や妊娠についての生理的限界についての知識が低く、初経教育は学校教育の中で行われていても、生涯にわたる女性の変化について学ぶ機会は少ないことが課題であるとしたが、性教育の内容の実態⁵⁾⁶⁾で示されている問題行動への教育だけではなく、ライフプランを立てるための基礎的な知識として妊娠・出産の限界についても知識として加えることが必要と考える。

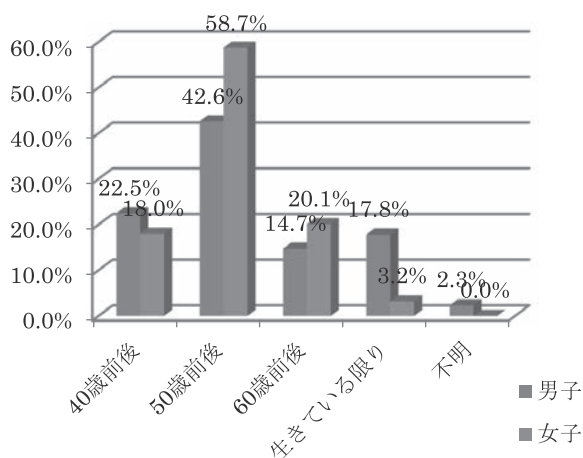


図9 女性の月経は何歳までだと思いますか (n=318)

6. 女性の妊娠について (図10, 図11)

妊娠の可能性については、50歳前後と答えたものが女子の半数以上であった。月経がある年限については6割の女子が50歳前後と正解していたが、月経が妊娠の可能か否かの指標になっていることがわかる。実際には、更年期に入ることによって妊娠に必要な排卵が起き難くなることや、無排卵性の月経時の出血があることは知識として低いということがわかる。また、月経や妊娠が「60歳前後まで」や「生きている限り」と答えたものが女子より男子に多くみられ、自分以外の性を知ることが妊娠や出産を含めたライフイメージをもつことにつながると考え、高校生に必要な教育であることがわかった。

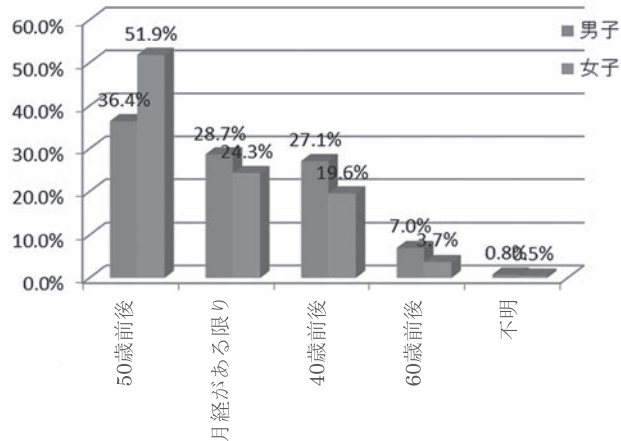


図10 女性はいつまで妊娠できると思いますか (n=318)

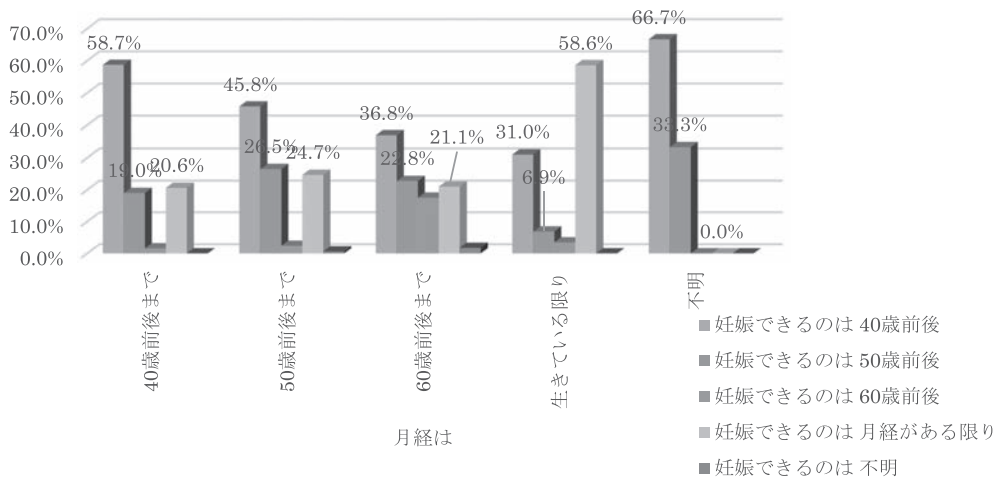


図11 月経と妊娠の関係 (n=318)

7. 性感染症や避妊についての意識 (図12, 13)

将来の自分を考える中で、避妊を考えることはライフプランを考えることにつながる。本調査の対象高校生は月経や妊娠についての知識が高いとはいえないが、セクシャルデビューは高校生から大学生にかけて高くなる。しかし、妊娠を望むまで「避妊をする」と答えたものは男子43.4%、女子47.1%といずれも半数以下であり、さらに「わからない」と答えたものが男子37.5%、女子33.3%と3人に一人であった。こうした背景には、避妊に関する知識が不足しているのか、自分ごととして捕えられていないのか、自信がないのかを考えて対応する必要があるが、性感染症や避妊について「とても身近なことで心配している」と答えたのは約10%であり、70%がいずれ心配する時がくると答え現実的ではないことが伺える。

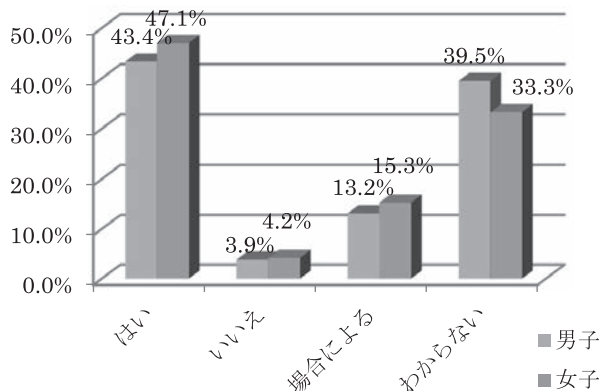


図12 妊娠を望むまで避妊しますか (n=318)

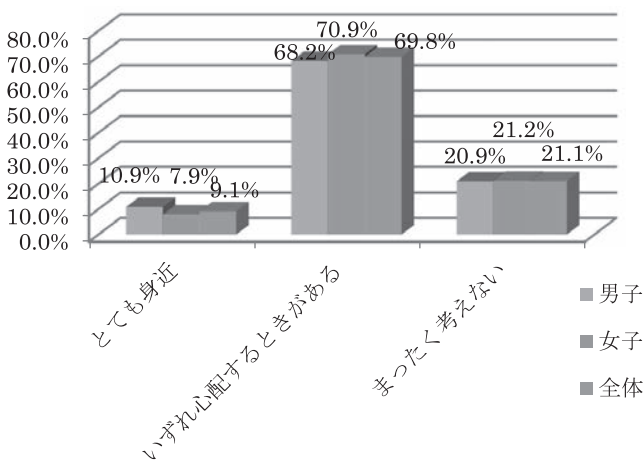
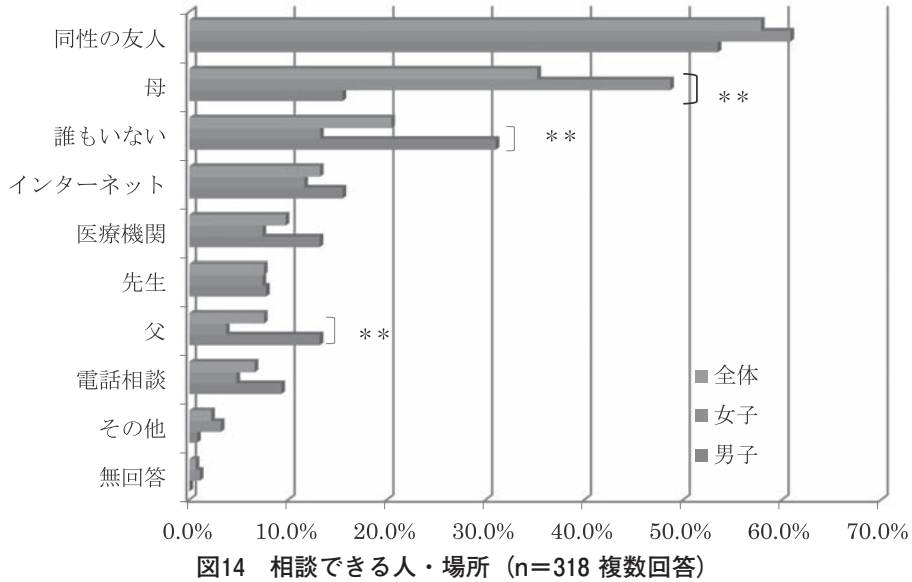


図13 性感染症や避妊に関してどのように感じているか (n=318)

8. 相談の場の有無 (図14)

性感染症や避妊については約9割が現実的課題ではないと答えているが、性に関する相談手段を持っているのかを聞いたところ、全体では「同性の友人」「母」「誰もいない」「インターネット」「医療機関」「先生」「父」「電話相談」の順であった。そのうち「母」は女子に、「誰もいない」「父」は男子に有意に高く差がみられた。また、前回の調査に比べて高校生の電話相談の割合が高かったのは、対象の居住環境が「市」と「町」の違いがあり、様々な情報へのアクセスの難しさが電話を選択されたのではないかと考える。「誰もいない」と答えたのは前回の調査同様男子の割合が高いが、「性に関して具体的に知りたいこと」が「無い」と答えたものが6割以上であり有意に女子よりも高いことと関係していると考えられる。情報入手の方法は男女とも同性の友人を頼りにしていることが伺えるが、情報の正確さの面から見ると、医療機関、先生、電話相談が薦められるが、いずれも10%前後であり知識を得られる場であっても相談できる場として活用されてい無いたことがわかった。



10. 性に関して具体的に知りたい事 (表1)

全体では「無い」が56.9%と半数以上であり、男子63.6%、女子52.4%と男子が女子より有意に高かった。「男女の心理・行動の違い」「愛とは」が次に多く「出産」「HPV子宮頸がん」は女子が有意に高く自分の身体に対する興味関心の高さが。また、「性行為感染症」や「人工妊娠中絶」と答えたのは男子が多かったが有意な差はみられなかった。

表1 性に関して知りたい事 (n=318)

	男子	女子	全体		
知りたい事	無い	63.6%	52.4%	56.9%	*
	男女の心理・行動	17.8%	20.1%	19.2%	n.s
	愛とは	10.9%	14.3%	12.9%	n.s
	出産	5.4%	14.3%	10.7%	*
	HPV 頸癌	5.4%	13.8%	10.4%	*
	LGBT	10.1%	10.6%	10.4%	n.s
	性行為感染症	11.6%	7.9%	9.4%	n.s
	自分のからだ	3.9%	9.5%	7.2%	n.s
	中絶	7.8%	5.3%	6.3%	n.s
	性は人生にどんな意味を持つか	5.4%	5.3%	5.3%	n.s
	性交	7.0%	3.7%	5.0%	n.s
	不妊	4.7%	6.3%	5.7%	n.s
	避妊	3.9%	5.3%	4.7%	n.s
	性欲	6.2%	2.6%	4.1%	n.s
	マスターベーション	2.3%	2.1%	2.2%	n.s
	無回答	0.0%	1.6%	0.9%	n.s

V まとめ

- ① 将来結婚を望む高校生は約75%であり、結婚を望む理由は「家庭をもちたい」「子どもをもちたい」という家庭や子どもに結びついたものであった。
- ② 将来子どもを望む高校生は70%以上であり、子どもを望む理由として家庭や子どもに対してポジティブなイメージを持っていた。
- ③ 月経や妊娠に対する生理学的知識は、月経の限界と妊娠の可能性について結びついていない高校が5割以上であり、少子化対策に結び付くライフプランを考える力をつけるためには、妊娠の生理学的限界を知ることが必要である。
- ④ 性に関する相談ができる場所は男子で「誰もいない」答えるものが3人に一人である。また相談先として同性の友人や母親と答えるものが多いが有意に性差がみられている。また、相談のしやすさが正しい知識を伝えられる役割としては充分ではないことが懸念される。今後正しい知識を伝える役割と、相談しやすい役割が近づく健康教育の組み立てが必要である。

VI 今後の課題

前回の調査では高校生と大学生の比較から大学生の現状を踏まえた健康教育の必要を知ることができた。今回はその具体的内容を検討するために将来を考える高校生に必要な情報は何かを調査した。今後この調査の結果をもとに高校生に向けた健康教育を実践していきたい。

VII 謝辞

今回調査に快くご協力いただいた高校生の皆様、熱心な取り組みをされている教員の皆様から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）, 2015, www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp
- 2) 丸岡里香：大学生のライフイメージについて－高校生から大学生の変化－, 北翔大学教育学部研究紀要, 創刊号, 2016, pp145-153
- 3) 平成24年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）「母子保健事業の効果的実施のための妊婦健診, 乳幼児データの利活用に関する研究」
- 4) 平成24-26年度厚生労働科学研究費補助金「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究」
- 5) 木村好秀, 齊藤益子：学校における性教育の実際, 思春期学, VOL.31 No.3, 2013, pp

285-292

- 6) 田原歩美：青年期を対象とした性教育プログラムの効果の検討，福山大学こころの健康相談室紀要，第5号，2011，